

[研究ノート]

# 検診の場における 造形ワークショップによる場づくり

羽賀 文佳(東北芸術工科大学大学院こども芸術教育研究領域2012年修了)

## 抄録

筆者は東北芸術工科大学大学院在学時に、2011年3月11日東日本大震災を経験した。大学のある山形県山形市は事故発生時、大きな揺れやライフラインの断絶があったものの、被害そのものも比較的少なかったことから、被災された方々の避難場所には選ばれることが多い場所であった。福島からの母子避難者もあり、知り合いもない土地で閉ざされた生活を送っている家族への心配が叫ばれた。同大学にはこども芸術大学認定こども園が存在し、そういったご家族の現状をなんとか打開できないものかという考えのもと、こども芸術大学に通うお母さんとこどもたちを中心にキッズアートキャンプ山形スピンオフ企画『福しまピクニック』が開催された。筆者は同大学院でこども芸術教育研究領域に所属し、「創作活動を通じて構築されるフラットな関係性と場づくり」をテーマに研究していた。『福しまピクニック』のスタッフとしてこの催しに参加した時に、社会的に弱者とされる者(ここでは避難移住者である母子)が新しい場を作り、関係性を構築していることに気が付いた。本研究は2012年以降京都に移住した筆者が「こども検診医療基金・関西」での顧問の医師による健康相談会での託児を造形ワークショップに充てることで、新しい関係性とともに関わられた場所を作るきっかけになることを目的としている。

## Key word

子ども、アートワークショップ、東日本大震災、医療検診、避難移住

## 1.はじめに

### 1-1.本稿の流れ

本稿は東日本大震災を契機とした関西圏への避難移住者を対象にした市民団体「こども検診医療基金・関西」<sup>1)</sup>(以下基金)での造形ワークショップがどのような効果をもたらすのかを記したものである。基金は、「2013年3月24日、市民の小さな力を集めて」設立された。「東日本から関西に、原発事故により避難移住している子どもたちの継続的な検診と医療助成、相談会等の取り組みをすすめることを目的としている」、市民団体である。2011年3月11日の東日本大震災および福島第一原子力発電所事故により、京都府内には福島県など公的受け入れの避難者に合わせ、関東や南東北からの自主的に避難・移住された方々が生活している。基金では、このような避難移住者を対象にした検診医療費用の助成、顧問の医師によるほっこり相談会(2カ月に1回程度)、相談会にあわせてカフェや子どもたちのワークショップを開催している。2017年8月までに、22回の相談会が実施され、多くのワークショップとともに多くの作品が生み出され、多様な関係をはぐくんできた。その中で筆者の行ったワークショップは15回。実施されたワークショップごとに、目的と内容を設定しふりかえりを行ってきた。

## 1-2. バックグラウンド

2011年3月11日、東日本大震災が発生した当時、筆者は山形にある東北芸術工科大学大学院こども芸術教育研究領域に在籍していた。東北六県の中でも、比較的被害の少なかった山形県は、この災害によって多くの避難移住者を受け入れる。2011年9月には、山形県に自主避難された福島県のご家族は1万2171人(山形新聞調べ)。抄録でも述べたように、そういった母子避難者の新しい関係性を創出するきっかけとして、キッズアートキャンプ山形<sup>2)</sup>は始まった。スタッフとして参加した際に、社会的弱者とされる者が新しい場を作り、関係性を構築している気付きを得た。それまで所属していた文化のはざま、あるいは辺境に生きることを余儀なくされた Robert Ezra Park の名付けたマージナル・マンになりうるのではないだろうか。

2012年に京都に移住した筆者は、関西にも避難移住されている方々が存在することを知った。何かしらの形で避難された方の力になりたいと思っていた時に、基金の代表である山内小夜子氏に「基金で行う相談会で子どもたちに向けた造形ワークショップを行って欲しい」という依頼を受ける。ワークショップを行うにあたり、いくつかの目的を設定した。

### 1 「健康相談にいらっしゃったご家族と子どもたちに気兼ねなく創作の時間を過ごしてもらおう。」

基金で行われる健康相談会は、原発事故に起因する放射能被害を主な相談内容としている。保護者は、慣れない土地での生活に加え家族の健康被害への不安により、かなりの精神的苦痛を強いられている。大人の不安は、子どもへも伝わる。そういったストレスを軽減する意味でも、造形ワークショップを通しての創作活動の持つ意味は大きい。創作活動は、自分自身を表現することのできる手段である。「上手い/下手」といった学校教育制度から外れたところにある、作ることへの没頭は作り手に大きな充実感をあたえる。

### 2 「野外から採集した自然物を利用したワークショップを考案する。」

避難者の多くは、放射能による被ばくを避けて野外での活動を控えていたケースが多く、以前のように自然物に触れることが減ったと「ふくしまピクニック」の参加者が教えてくれた。自然物の造形はそれだけで創作意欲を刺激するものがある。「すべての造形は自然の模倣から始まる」と言われるように、人の手が入らないものの形が私たちの感性に与えるものは大きい。

### 3 「できるだけ幅広い素材に触れてもらう。」

2で触れたような自然物を利用したワークショップは、事前の植物採集や季節により左右される場合が多い。参加者にはできるだけ多くの素材に触れてもらいたいと思った。触れる素材との対話を通して、新しい創造を生む手助けになればという願いを込めている。これら3つを踏まえたうえで、どのような実践を行ってきたのかを実際に行ったワークショップの実例を挙げ、その可能性を考察したいと思う。

## 2. 震災以後の関西圏の取り組み

震災以後、福島及び関東圏の母子が避難移住先に選んだのは日本各地様々である。東京以西という理由で関西を選ばれた方は少なくない。

京都府災害支援対策本部は、震災に伴い様々な対策を行ってきた。住宅支援として「東北地方太平洋沖地震等の被災者に対する府営住宅の一時使用」や、就労支援として「東北地方太平洋沖地震関連緊急雇用創出事業」など、その対策は多岐にわたる。行政だけではなく、NPO法人をはじめとした民間団体の避難者支援の取り組みも多く、公・民の連携を図るために平成24年2月1日には「京都府避難者支援プラットフォーム」<sup>3)</sup>が立ち上げられた。それぞれに掲げる目標や意識は異なるが、共通するのは「継続した支援」である。その内容には身体の状態も大きく関わっており、継続した健康検査が叫ばれている。しかし、避難者支援打ち切りや就労困難など金銭的に継続的な検診が望めない移住者も存在している。そういった家族を対象にした医療費の助成と顧問の医師による無料の健康相談会を行っているのが基金である。「子どもも大人も」と銘打っているのは子どもたちの継続した検診を行うためには、大人の健康状態も重要であり必要であるからだ。(図1)相談会での検診から病院への紹介や2014年以降は、専門の技師による甲状腺エコー検査も無料で行われるようになり、相談会参加者の多くが継続的な検査を行うことができています。



図1 子ども検診医療基金・関西 第22回ほっこり相談会 チラシ

そういった検診の場にワークショップスペースが存在することが、果たしてどのような役割を果たせるのか。抄録にも記したように、避難移住者というマージナル・マンこそが、造形表現を通して新しい場所や関係性を構築していくことができるという創造が一番の目的である。

### 3. 検診を行う現場

相談会及び検診を行う場所をどこに定めるか。これは多くの市民団体がまずもって考えることだろう。基金は真宗大谷派(東本願寺)の僧侶・山内氏が代表を務める市民団体である。東本願寺は京都市下京区、京都駅からほど近いところに本山があり、その周辺にも関係する建物が多く存在する。相談会の前身である「京のお庭でほっこり会」も、涉成園枳殻邸で行われた。その茶話会の中で「専門的な相談がしたい」「避難者同士で情報交換ができれば」「小さな不安でも誰かに聞いてもらいたい」。そういった避難者の思いと市民の思いが重なり、「ほっこり相談会」は始まった。

第1回ほっこり相談会は本山の施設である旧・青少幼年センターで行われた。避難移住というデリケートな案件であるため、参加者のプライバシーが第一に考えられた。施設内の会議室を顧問の医師・看護師・スタッフ・参加者が待機し茶話できる部屋として使用し、個別の相談室を図書室や資料室、応接室に設けることで3部屋、合計4部屋を使用して相談会はスタートした。その後放射線技師の有志により、甲状腺エコー検査を行えるようになり、これまで相談室として使っていた一室を、検査室として使用することになった。旧・青少幼年センターは2014年10月まで使用。以後は隣接する場所に新築されたしんらん交流館を使用している。そこでの部屋割りも、以前の施設と同じように待機兼カフェスペース、検査室、相談室×2の合計4室で構成されている。

## 4. 事例

### 4-1. ワークショップ概要

2013年10月27日から2017年8月現在までほっこり相談会は22回を数える。そのうち、筆者が行った造形ワークショップは15回である。ワークショップを行うスタッフは筆者を含めボランティアのスタッフが1~3名。相談会開始前に実際に作品を制作し、作業工程を確認したうえで子どもたちのサポートをお願いしている。ワークショップの企画はいくつかの性質で分けることができる。「個人制作／共同制作」(個人／共同と表記)「平面作品／立体作品」(平面・立体と表記)「作った作品を持ち帰ることができる／できない」(持ち帰り可・持ち帰り不可と表記)の3つを企画名とともに記したい。

- (ア)「秋のおくりもので冬の準備をしよう!」個人／立体／持ち帰り可(2013年12月6日)
- (イ)「鬼のお面で節分を楽しもう!」個人／立体／持ち帰り可(2014年1月19日)
- (ウ)「色がいろいろ いろんな世界」個人・共同／平面／持ち帰り不可(2014年3月16日)
- (エ)「あの島 この島 どんな島?」個人・共同／半立体／持ち帰り不可(2014年5月25日)
- (オ)「どんな鳥を見つけたの?」個人／半立体／持ち帰り可(2014年5月25日)
- (カ)「みんなの手が筆になる!手作り絵の具で絵を描こう!」  
共同／平面／持ち帰り不可(2014年10月5日)
- (キ)「木のオブジェをつくろう!」個人／立体／持ち帰り可(2014年12月6日)
- (ク)「こどもポロック」共同／平面／持ち帰り不可(2015年9月13日)
- (ケ)「木の生き物をつくろう!」個人／立体／持ち帰り可(2015年11月29日)

- (コ)「木っ端 つみつみ」個人／立体／持ち帰り可(2016年4月10日)  
 (サ)「描いて食べる静物画」個人／平面／持ち帰り可(2016年6月13日)  
 (シ)「糸と〇〇」個人／立体／持ち帰り可(2016年10月2日)  
 (ス)「ゆく年 くる年 酉の年」個人／立体／持ち帰り可(2016年12月25日)  
 (セ)「木っ端 ペたペた」個人／平面／持ち帰り可(2017年4月16日)  
 (ソ)「あなたの虫はどんな虫?昆虫すごいぞ!」個人／平面／持ち帰り可(2017年8月26日)

筆者がワークショップを行うようになった第3回ほっこり相談会(会場・旧青少幼年センター)では、医師・看護師・スタッフ・参加者の待機場所の一角を利用。使用した机や椅子はもともとその部屋にあった会議用のものだった。当然ながらサイズは大人向けであるため、未就学児及び小学校低学年には大きすぎた。子どもも大人も使いやすい道具を使うことは、より多くの人に関われるきっかけになる。角椅子を使い天板を乗せて座卓を作り、子どもも大人も同じ目線で靴を脱いでリラックスして作れるような空間を作った。

2014年12月以降会場はしんらん交流館という新築の施設となった。制約が増えたことも事実だが、これまでの相談会及びワークショップを通して築いてきた関係性によって、様々なアプローチからのワークショップを行えたことも大きい。参加者から「次はこのような造形活動がしたい」という要望が出てくるようになった。

#### 4-2. ワークショップ概要

ここでは実際に行われたワークショップの活動のいくつかを「目的」「内容」「ふりかえり」を踏まえて、参加者の作った創作物と共に紹介したい。なお、紹介するワークショップは「個人制作／共同制作」「平面作品／立体作品」「持ち帰り可／持ち帰り不可」がまんべんなく紹介できるように選んだ。なお、写真の撮影や掲載についての承諾は基金のスタッフを含めた参加者全員に得ているものとする。

##### (ア)「秋のおくりもので冬の準備をしよう!」(2013年12月6日)(図2)

###### <目的>

- ・健康相談にいらっしやっただご家族のこどもたちに創作の時間を過ごしてもらおう。
- ・外へ出て自分の気になる落ち葉を見つけて季節の変化を体感する。
- ・震災以降、京都へ来る前に暮らしていた場所では、外での活動が制限されていたと思われる。なので、制限なく外で自然物を触れられることを楽しんでもらいたい。

###### <内容>

作った後も家で飾ることのできるリースを作る。材料は自分で集めるところから初めて、形をつくり、デコレーションするまでを完成とする。

使用する材料は、落ち葉、枝、色鉛筆、デコレーションパーツ、糊、テープなどである。落ち葉や枝は、あらかじめある程度こちらで準備する。デコレーションパーツは100均のビーズや鈴を準備。糸は知人から多く譲ってもらえることになったのでそれを使用した。

〈ふりかえり〉

- ・事前に準備したものしかなかったが、それでも、松ぼっくりやどんぐりなど、自然の中で見つけてきたものに興味を示していた。それを創作物に取り入れることはなかなか難しかったようだが、それでも、「これは全部京都の自然で拾ってきたものだよ」をいうと、驚いていたところを見ると、なかなか自然に触れる機会は少ないのかもしれないと思った。もっと簡単にそれを創作物に取り入れることが可能なワークショップを考えたい。



図2 (ア)「秋のおくりもので冬の準備をしよう!」ワークショップ

(ウ)「色がいろいろ いろんな世界」(2014年3月16日)(図3)

〈目的〉

- ・生まれたての赤ちゃん(釈迦)に色とりどりの外の世界を見せてあげよう。
- ・普段見ている外の風景の中に、新しい色を見つける。

〈内容〉

- ・フロッタージュ(こすりだし)という技法を使う。使用する道具はパステルまたはクレヨン。クレヨン使用後はベビーパウダーを使用しクレヨン独特のべたつきを抑える。
- ・子どもたちがフロッタージュで作ってきた様々な表情の紙から、新しい生き物の姿をみつけて、切り抜く。切り抜かれた紙を赤ちゃんのいる大判のクラフト紙に張り付けていく。

〈ふりかえり〉

- ・赤ちゃん和白象だけの画面に沢山の生き物が現れた。フロッターージュにより作られた紙からどのような生き物がふさわしいかを読み取り制作。(個人)できた生き物を他の参加者と相談(対話)しながら、どこに配置するかを決める。個人の作品を通して他者との対話を行い一つの作品を完成させる。



図3 (ウ)「色がいろいろ いろんな世界」ワークショップ

(カ)「みんなの手が筆になる!手作り絵の具で絵を描こう!」(2014年10月5日)(図4)

〈目的〉

- ・筆や鉛筆などの道具を使うことに捕らわれずに、指や手、腕など、体をたくさん使って色を塗る感覚を楽しむ。
- ・一色だけの色の中に、色の濃淡、物質としての厚みを観察する。その中に生まれる絵具の表情から、画面を読み解いていく。

〈内容〉

- ・絵の具のもととなる、顔料(土系・イエローオーカー、ローシェンナ、ローアンバーのいずれかを使用)と洗濯糊を素手で混ぜ、参加者は手で色を乗せていく。洗濯糊はph0なので、直接触れても安全である。使用する顔料も、精製されている。

- ・汚れてもよい服装で来ることを事前連絡しておく。(着替えが必要な場合は準備する)
- ・具体的なものを書くのではなく、紙に絵具を広げていく感覚を大切にしたい。書くときは床にブルーシートを敷き、その上に模造紙(またはロール紙)を敷き、自由に色を乗せていく。
- ・一人一枚ではなく、みんなで一枚を塗り進める。
- ・一面すべて塗り終わったら乾燥させ、絵を縦にする。その後参加者全員で読み取り(リテラシー)の時間を持つ。ただ塗っただけの画面に、どのようなものが見えるかをみんなで話し合う。
- ・このワークショップの展望としては、制作した絵によみとれたものを書き足していくこともできる。
- ・使った後の絵の具の残りをスライムにして遊ぶことも可能。

### 〈ふりかえり〉

年齢や性別の異なる他者と、共通した方法を用いることで一つの作品を作り上げる。「鑑賞にふさわしい作品を作る」という意識がなくてもよい。自分の手足、体を存分に使ってただ色を塗る。そのシンプルな目標を達成するために、参加者は自らを解放することができる。もちろん全員が汚れることを恐れないわけではない。「汚れないようにするためには…」と考える。次第にそれは「絵の具を作ること」に没頭していく。

没頭する時間を十分に楽しむことができれば、次は読み取りの時間である。意図せずに作り出した画面から何かを読み取ることができるのか。「人は漠然とした形からも、具体的な何かを引き出す能力を持っている」[ Arenas1998,33-34]のだ。参加者全員の言葉を拾い上げ、ものの見方を共有する鑑賞の時間が、ただ楽しいだけの時間を意味のある場所へと変化させてくれる。



図4 (カ)「みんなの手が筆になる!手作り絵の具で絵を描こう!」ワークショップ



(キ)「木のオブジェをつくろう!」(2014年12月6日)(図5)

<目的>

- ・大小様々な大きさ・形の角材に触れ、その形から自分の作りたいものを見つけていく。
- ・木の触感やにおいを楽しむ。

<内容>

- ・絵の具はポスターカラーを使用。作品に応じてニス塗ってもよい。
- ・ももとの角材の形を活かすだけでなく、様々な形と組み合わせてもよい。
- ・できた作品は飾れることを目標にする。金具を取り付けてブローチにしてもよい。

<ふりかえり>

ものとの対話を個人で行うことに焦点を当てた。選んだ木材が何に見えるか。どんなものを作り、どんな色にするか。参加者が満足できるまで取り組む。できた作品を持ち帰ることを前提としていたので、完成度の高さ、参加者の満足度達成感を最も重視した。



図5 (キ)「木のオブジェをつくろう!」ワークショップ

(ク)「こどもポロック」(2015年9月13日)

<目的>(図6)

- ・自分の体よりも大きな布に、筆や鉛筆ではない道具を使って色を広げていく感覚を楽しむ。
- ・どの部分のどの場所に新しい色を乗せたらいいか、様々な角度から見ることで視点の転換を図る。

<内容>

- 絵の具は墨汁とポスターカラーを使用。
- 使う道具は掃除用のホウキや卓上ホウキ。絵の具を入れるものは洗面器とバケツを使用する。
- できた作品乾燥させ、F100の木枠に貼る。壁にかけての鑑賞を可能とする。

<ふりかえり>

「野外での創作活動」が目的の一つだった「こどもポロック」は、普段絵を描くことには使われない掃除用ホウキを使用しての取り組みである。参加者は本来の使用目的とは異なるものも、描くための道具になるという発想の転換と、道具を使うための身体の使い方を考えざるを得ない。

これは個人制作ではない。道具も自分専用ではない。参加者との対話が必要ならば、絵の具を広げた場所に誰かが別の色を広げてしまうことだってある。対話が必要になる制作だった。



図6 (ク)「こどもポロック」ワークショップ

## 5. 考察

ワークショップを実施して感じたのは、創作活動というものは子どもと大人の境界を取り払う、非常に有効な手段だという事である。評価を意識せずに子どもたちの作るものには、独自の世界観が如実に反映される。子どもたちが集中して創作に取り組み、他の参加者やスタッフとおしゃべりをしながら作業を進めている様子は学校でも家でもない、第3の場所として機能している。相談会に初めて参加した相談者も、このような場所があることで、緊張を緩めることができたという。

## 6. 展望

ワークショップを行うにあたり建てた3つの目標は、相談会の回数を重ねることで少しずつ変化していったように思う。主な理由として、避難移住者の生活の変化と経過年数があげられる。基金が設立された2012年より、実に5年が経過した。当時未就学児だった子が小学生になり、小学生も中学生や高校生になった。ワークショップ参加者もピークの2014年～2015年以降は半分ほどになった。相談会は2か月に1度のペースで行われる。あくまでもほっこり相談会は、健康相談会という検診を目的とした相談会である。年に2回の検診を推奨しているとはいえ、年6回の相談会の全てに参加する人は決して多くない。そういった意味では、当初立てたワークショップの目標をある程度修正する時を迎えているのかもしれない。相談会そのものも、今過渡期を迎えている。それに伴って、場を作り関係を作る造形ワークショップのあり方も刷新していく必要がある。本当に創作活動が検診という場に必要なのか。

震災から6年。未だに事態は収束したとは言えない状況にある。原発問題は過去のものではなく、現在進行形での問題だ。電気を使って生活している限り、私たちはこの問題を他人ごとで済ませてはいけない。京都府の被災者定期便は現在約200世帯にまで減少した。このことを自体が好転していると考えるのは早計だろう。京都以外の新しい避難先で定住することのできた家族も存在するが、避難者支援が打ち切られ、やむを得ず郷里に帰る家族を私たちは見送ってきた。

ものづくりを通して新しい場所を創造することは、たやすいことではない。けれど、「作ることの喜び」は「自己を表現する」ことへつながっている。それらの経験がこの先を生きる子どもたち大人たちへの糧になり、自らが新しい場所を作り出しつづける力になることを願ってやまない。

## 注

- 1)「こども検診医療基金・関西」<http://kodomokenshin.com/index.html>
- 2)キッズアートキャンプ山形は「TRSO(Tohoku Revival Services Organization=東北復興支援機構)」のひとつのプロジェクトとして始まった。2011年から始まったこの試みは、現在も継続中である。  
「TRSO 東北復興支援機構」<http://blog.tuad.ac.jp/trso/blog/>
- 3)「京都府避難者支援プラットフォーム」  
<http://www.pref.kyoto.jp/saigaishien/hinanshasien-pf.html>

## 参考文献

Amelia Arena, 福のり子訳, 1998, 『なぜこれがアートなの?』淡交社

磯部錦司 福田泰雅, 2015『保育のなかのアート プロジェクト・アプローチの実践から』小学館

森下伸也, 2000, 『社会学がわかる事典』日本実業出版社

Nicolas Paley, Finding Art's Place — experiments in contemporary education and culture, 1995, Routledge, London and New York

(菊池淳子, 三宅俊久訳, 2001『キッズ・サバイバル 生き残る子供たちの〈アートプロジェクト〉』フィルムアート社

佐藤学, 2011, 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』ACCESS